

制度や分野を超えた共同事業体による分散型居場所事業

■取組の概要、経緯

あいまる川西共同事業体という体制で各事業者が連携し、以下のような月 15 回程度の居場所づくりを実施しています

- └家族会では語れない家族自身のことを話し合うカフェやオンライン居場所（ひきこもり支援）
- └日中に子育て支援をしている場で、夜間に食べる・遊ぶ・癒される・話す・繋がることを盛り込んだ居場所（子育て支援）
- └何かを強制されない・色々な世代で話せる寺子屋・ヨガ・心理学カフェ（若者支援）
- └他の居場所には行きにくい中高年の男性を中心とし飲食をする中で気軽に愚痴を言い合えるような喫茶（こども食堂）
- └コープこうべの託児所を再活用し講師を招いてのパン教室や母子手帳カバー作りを通じた居場所（発達支援）

■基本情報

○官民連携事例

○取組の実施機関：特定非営利活動法人百生一輝

- ・対象地域：兵庫県川西市（その他近隣各市町村）
- ・連携の実施機関：

特定非営利活動法人百生一輝（全体統括・事務局・ひきこもり支援）、NPO 法人育ちあいサポートブーケ（夜の親子の居場所づくり）、一般社団法人 i-coi（公共施設を活用した若者を中心とする多文化・多世代で学びあう寺子屋）、スパイスカレーミルズ・ケプリ（こども食堂・多世代交流拠のカフェ）、生活協同組合コープこうべ（託児所を活用した子育てに不安を感じている母親の居場所づくり）、川西市役所地域福祉課（事業委託元）

○取組の実施期間：

- ①定例会：2022 年度より毎月開催しており、参加者は平均 10～20 人程度です。
- ②オープンチャット：参加者が増えてきた 2023 年度より実施しており、50 名弱でイベントの周知・情報交換の場となっています。
- ③2024 年 7 月よりプロポーザルにて受託して、参画団体により月 10～15 カ所程度の分散型居場所を実施しています。

○対象者のライフステージ区分：

子ども～就学前、妊娠期から就園前、就学前（概ね 3～5 歳）、小学生、中学生、高校生、大学生、大人、若年層（中卒・学業中退者 18 歳～34 歳）、中年層（35 歳～64 歳）、

高齢層（65 歳～）、年齢や属性を問わない

○URL：

あいまる川西の note https://note.com/aimaru_kawanishi

川西市地域共生型居場所事業について

https://www.city.kawanishi.hyogo.jp/kurashi/fukushi_kaigo/1001143/1020435.html

■取組のより詳細な実施内容

「あいまる川西共同事業体」（以下、あいまる川西）は、川西市からのプロポーザルを受託して、子どもから若者・障がい者・高齢者まで誰もが気軽に通えることができるような機能を持った「地域共生型居場所」を運営している。

○あいまる川西の活動理念

「合間」を「埋める」。支援と支援の合間を埋めることにより、地域に福祉資源が「相まる」環境を生み出し、当事者目線で支援につながりやすい地域づくりに寄与する。

○あいまる川西の構成団体

-全体総括・事務局

NPO 法人百生一輝（ひきこもり支援・就労支援）

-参画団体

NPO 法人育ちあいサポートブーケ（子育て支援・居場所づくり）

一般社団法人 i-coi（学び支援・居場所づくり）

スパイスカレーミルズ・ケプリ（こども食堂・シェアハウス運営、居場所づくり）

生活協同組合コープこうべ（子育て支援・居場所づくり・地域サポーター活躍支援）

○3つの核となる活動

・あいまる会（月1回の定例会）

・オープンチャット（行政・社協・教育・企業・お寺など関係者約50名が参加）

・共生型居場所事業（川西市の委託事業として月15回程度実施）

■課題や苦労した点

制度別・分野別の支援が進んだことによる社会的孤立をなくすには、支援者同士が繋がる必要があると考えている。各居場所の往来や日々の困りごとの共有を行い、自らの団体や居場所には合わない（対応できない）際には相互リファーを実施している。背景が異なる他団体との連携を図るには実現したいことの共有や考え方のすり合わせ、活動に取り組んできた中での困難、個々人の思いなど相互理解を深めるのに3年以上の月日をかけてきた。

■取り組みの効果

雑談から相談へ→「じつは…」と切り出せるように、雑談を通じて関係構築していくこ

とで、悩みを言いやすい場づくりを目指している。

予防的な介入→困りごとが明確になってからでは時間・金額面のコストが大きいため、悩みが明確でない時から見守りを行っている。

多様な接点づくり→ネットワークを構築していることが何よりの強みでもあるため、対象者を限定せずに分散型で居場所を実施している。

■取材をして

分散型居場所事業の革新性

「対象者を限定せずにワンストップ型であれば誰でもが通いやすいだろうと考えるのは間違っている」と、あいまる川西の全体総括を務める NPO 法人百生一輝理事の大西さんは言う。「この居場所とはなんだか相性が悪い」「行きにくい場所にある」「あの人が苦手」などワンストップ型が 1 か所しかなければ選ぶこともできず、やっぱりだめだったという新たな孤立の再生を生みかねない。分散型というのは、地域に居場所がちらばり、その団体の専門性や得意な分野を活かした居場所のことである。必ずしも固定の居場所ではなくてもよい。

一見多世代型の居場所は良さそうに見えても、「いつも小さい子がいると気が休まらない」という年配者もいるし、ある程度年齢層やテーマ性が近い方が居心地良いという面もある。一方、分散型居場所は、利用者にとっては①フィットする場所が見つかりやすい、②通いやすい、③選べるというメリットがありそうだ。さらに、実施している団体にとっては、①固定した居場所を持つ必要がない（既存資源の活用）、②場所代等固定費の削減というメリット、地域にとっては、地域全体の活性化などが期待できるというわけだ。各居場所の日々の運営や有事に際には、IT を活用した支援者間の情報共有や相談を行うことでカバーしている。分散型居場所事業は、とてもリーズナブルで理にかなっているという革新性にあふれているからこそ、どの地域でも実施できる可能性があると思えた。

システムとしての 2 階建ての支援

支援のあり方として、システムとしての **2 階建ての支援**を大切にしている。1 階部分は広く開かれた居場所として、多様な人々が自由に訪れ、気軽に交流できる空間。そして 2 階部分には専門機関が位置し、1 階での関係性を基に、必要に応じて専門的な支援につなげる仕組みである。従来の相談機関では、自ら「しんどい」と訴えないと支援につながりにくい、このモデルでは、1 階での何気ない会話や交流が相談のきっかけとなることを大切にしている。1 階部分で日常的な関係を築きながら、必要に応じて 2 階の専門機関が介入するという構造が、効果的な支援につながると考えている。

具体的な支援内容

見学させていただいた具体的な支援について以下記載したい。

<NPO 法人百生一輝／オンライン居場所&時カフェ>

百生一輝は、障害福祉サービスを中心に障がいや持病等で働きづらい方等が対象となり、そこに該当しない人（障害者手帳は持っていないが生きづらさを感じている人等）は支援が難しいという課題があった。そこで、当事者のご家族が安心して雑談ができる場を提供している。また、家から出るのが難しいひきこもり層を対象にオンラインの居場所にも取り組んでいる（e スポーツを実施している就労支援事業者 ONE GAME との共同実施）。見学させていただいた場所は、ケーキ工房を廃業しようとしていたオーナー兼パティシエとの協力で実現した就労継続支援 B 型事業所。まさにケーキ屋さんがなくならず、地域貢献にもつながる活動になっている。川西市の委託事業である生活困窮者・生活保護受給者の就労の場所としては、地域のお寺「勝福寺」の清掃がある。本寺院では公共的な事業であれば集会所を地域に開放しており、音楽イベント、書道等各種行事に使ってもらっているという。



<学習サポート i-coi／学習の場&いこいカフェ>

多世代・多文化で学び合う寺子屋として、ボランティアを基本に学習の場の提供と並行して、問題が顕在化する前の予防的な取組として、子どもたちへの支援に取り組んでいる。主に、アステ市民プラザの貸会議室を借りて、月 2 回の学習サポート、月 1 回の専門職によるおしゃべり心理学、ゆったりヨガ等を予約不要、無料で提供している。見学時も、講師を中心に当事者、支援者、関係者らが話を丁寧に聴き、受け止め合う場として気楽にお喋りできる空間となっていた。



<NPO 法人育ちあいサポートブーケ／よるぶーけ>

普段、日中には地域子育て支援拠点事業の運営をしているが、アステ市民プラザの貸会議室を借りて月2回金曜日の夜に「みんなのスペース よるブーケ」を開催。週末の夜という開放感の中で、食べる・遊ぶ・癒される・話す・繋がるを盛り込まれた居場所づくりを行っている。

子どもや親によっては、夜の方が来やすい（仕事帰り等）場合もあり、小学生などは学校が違うからこそ混ざり合って「夏休みの親戚の家」のような状況生まれる。見学時は、父親の姿も多く昼の居場所とはまた違った雰囲気。赤ちゃんから小学生まで年齢が異なる子どもたちが遊ぶ様子を見ながら、大人たちがカレーを食べゆったり過ごす様子が印象的でした。



<スパイスカレーミルズ・ケブリ／ゆる喫茶&コーヒー焙煎会>

店舗や空き家を活用し、生きづらさを抱えるような人達が、気軽に集えるような居場所を提供している。自分たちでコーヒーを焙煎して飲む活動も行っており、雑談や食事をき

っかけに、生活や仕事についての相談がしやすくなるように、18歳未満の子どもにはカレーが無料のこども食堂の時間もある。アステ川西の地下1階にはカレーを食べられる場所、働く経験を積める店舗も運営している。

見学時は、駅近くの路地にある狭くカウンターだけの店舗にもうかがいましたが、カウンター内との距離も近く、ここなら安心して話せる人がいるだろうなと思える空間。行政が設置するような支援の場には行きにくいと感じている人も少なくなく、そのような人にとって、困りごとや不安、ニーズ等を聞くことができる場所となっている。商業施設内のきれいな店舗とは対照的であるがゆえに、多様な人たちの入り口になり得るのだと納得する。ちなみに「みんなのスペース よるブーケ」で提供されていたカレーは、スパイスカレーミルズ・ケプリのカレーである。



<生活協同組合コープこうべ／コープさんのところ>

コープこうべの休閒施設となっていた配送センター内保育ルームを活用。専門知識を持ち尚且つ子育て中の親の相談相手となり得る地域のサポーターを招き、親子が参加できる様々なプログラム（パンや母子手帳カバーづくり、ベビーマッサージ、産前産後ヨガ、音楽療法など）を実施している。子育てにより社会と繋がる選択肢が狭まっている親が安心して地域社会と繋がる意欲やきっかけを得られたり、こどもの発達に不安を覚えている親が対処法となる専門知識を得られる2階（専門分野）へ繋がる階段を案内する居場所として実施している。駐車場が確保されており、近隣のみならず広域から利用者が訪れる。産後はじめての外出機会になる親子もあり、市内やあいまる川西の他の居場所情報や、コープこうべのネットワークを活かした情報提供を行う機会も多い。



多様な事業主体による共生型居場所から生まれた強み

◆低敷居と専門性のハイブリット機能

よるブーケ、ゆる喫茶、体験会などカジュアルな活動が入り口となり、相談ではなく居場所から気軽に来てもらえるのが大事。スタッフは支援者として会話や交流の中で本人のつぶやきや行動から観察、アセスメントが可能となる。自分たちの専門性で対応できない場合は、あいまる川西構成団体との連携が日頃からできていることが強みとなる。

◆複合課題への多角的な予防的介入

例えば母子の支援については、母親支援とこども支援を一体的に捉えて両面からサポートするなど、多角的に家庭をとらえて場合によっては能動的で予防的な介入を進めることが可能となる。

◆あいまる川西の構成団体による情報共有と包括的支援

構成団体内で情報共有を図ることで、特定の支援機関の枠を超えて、包括的に見守る体制が強化される。

◆継続的な関係性が本音を引き出し、危機を防ぐ

何かあっても頼る先があるという安心感を提供すること。危機的な状況にあっても行政と連携し、複数の構成団体が見守るという土台の上に、家庭全体に継続的に関わり続けるというスタンスを持ち続けることが可能となる。そのことは結果として相談者を孤立させない、見放さないということにつながる。

これから

なぜ入り口は分散型の居場所なのか、なぜ多様な事業者と連携して事業をおこなっているのかとよく聞かれるそうだ。当初の「もう少し横のつながりができれば」という考えから、思った以上に広がりを見せ、手ごたえを感じる活動になっているようだ。全国的には、分野横断的な相談や居場所の提供といった重層的支援体制整備が進められているが、具体的にどの程度当事者にリーチできているのだろうか。本事業は、制度や分野を超えた共同事業体による分散型居場所事業として、その解に対するひとつのチャレンジであると確信した。

(取材者 奥山千鶴子)